

# 発生的現象学における時間と他者

山口 一郎

フッサールの発生的現象学は、20年代からのフッサール現象学の展開を決定づけているが、その内容と方法論は、いまだ明確になっていない。この領域は、次第に明らかになっていったという領域そのものの開示のプロセスをもつ。その際、最も重要な契機となったのが、時間構成の分析と、時間内容に重点をおいて深化した時間分析でもある、20年来展開した「受動的総合の分析」である。この展開に関して興味深いことの一つに、最近公刊された、『時間意識についてのベルナウ草稿』(Hua. XXXIII)執筆期である1917/18年に、受動的総合の分析の端緒が見出されることである。また、『デカルト的省察』の第38節には、「能動的発生と受動的発生」が表題として記されているが、この記述は、まさに表題の記載にすぎず、この表題の下に、すでにフッサール自身の探求が山積しており、この発生的現象学の分析群こそ、フッサール現象学研究者にとって解明の必要な、重要な課題であるといえる。

フッサールの発生の概念は、従来の伝統的な対概念である、カント的意味での「発生と妥当」において把握することはできない。「心理学的一経験論的事実性と論理的ー超越論の本質」という二元性においては、理解できない。彼の発生の概念は、それら二元性に先行し、それら二元性の起源と生成を証示するものである。この観点からして、これまでなされてきたフッサール現象学の重要な問題である時間と他者についての諸批判は、その効能を喪失し、その諸批判そのものに含まれる、特定の形而上学的前提にたつ誤解であることが判明するだろう。

## 1. 発生的現象学における時間

### 1) 時間意識の逆説的自己構成の問題

ベルナウ草稿の内容を通覧すると、この草稿は、時間形式が中心になる『時間講義』と、時間内容に重点を置く『受動的総合の分析』における、具体的で生き生きした現在の発生現象学的時間分析を橋渡しする役割を果たしているということができるだろう。

ベルナウ草稿において興味深いのは、『時間講義』の時間構成の問題の展開を記述したB群の論稿において取り扱われている「無限遡及」の問題が、再度、集中的に探求され、その解決が求められていることである。『時間講義』のB稿では、例えば、時を経るという持続の時間意識が、過去把持的射映におけるヒュレー的なもの（「ヒュレー的素材」、Hua.X, S.24）を活生化する統握作用が持続という統握内容を構成しているのだという、いわゆる統握図式によっては、持続という現象を分析解明できないことが明らかにされている。その統握図式では、われわれの意識に直接与えられている持続という現象に含まれていない輻輳した意識構造を必然的に要請せねばならなくなるという問題である。というのも、あらゆる時間意識の統握内容、例え

ば、過去把持を通す過去や、印象による今の意識が、ヒュレー的なものに向けられた統握作用を通してのみ意識されているとすると、「すぐに次のような意識についての問いが頭をもたげる。この統握作用そのものが一つの内容であり、このような統握作用がそこで意識されるような意識への問いである。そして無限遡及が避けられなくなる。」<sup>1</sup>

この問題の解決に向けて、ベルナウ草稿では、二つの方向が取られている。一つの方向は、時間流の「原プロセス」に向けた解決であり、この原プロセスでは、気づかれずに、無意識的に時間流が構成されているというのだ。このような原プロセスでは、時間内容は、それに相応した統握作用の働きなしに、反省作用以前に、先構成されてありうるのである。「次のような形で、すなわち反省以前の原プロセスで、この諸困難を解決するよう試みる。あるいはこういった方がいいだろう。注意する把握が支配する以前に、原生起と弱まりの端的なプロセスが、統握ないし、代表象なしに存在する。感覚素材が気づかれずに立ち現れ、経過するというように。」(Hua. XXXIII, S.245)

もう一つの方向は、『時間講義』で過去把持の縦と横の、二重の志向性によって解決しようとする方向と同一の内容を指している。しかし、その際、時間内容の合致が生じる縦の志向性が、統握作用である能動的志向性ではなく、自我の活動を欠く受動的志向性と理解されて初めて、この解決は解決になるのであり、それが徹底されずに自我の活動による能動的志向性が密かに潜入してくるような考察が介入すると、再三再四、無限遡及の問題に引き戻されてしまうのである。(30年代の時間草稿にもいまだこの傾向がみられることに注意しなければならない。)

この二つの方向を考察すると、時間流の逆説的事態、すなわち、『時間講義』ですでに明らかになっていた、絶対的意識流と過去把持による逆説的自己構成の問題が、問題として明確になる。この絶対的時間流の自己構成において「構成するものと構成されたものとが合致している」(Hua.X, S.83)。そしてこの次元では、すべての内容がそれ自身において、必然的に「原意識されて」<sup>2</sup>いる。ここで重要なのは、この自己構成が、過去把持の縦の志向性にそのまま妥当していることである。「したがって、流れを通して、縦の志向性が生じ、この縦の志向性は、流れの経過において、絶えざる自己自身との合致統一においてある。」(Hua.X. S.81, 強調は筆者による)この合致統一こそ、実は、時間内容をいかなる自我の活動の関与なしに統一する受動的綜合に他ならないのである。

フッサールは、こうして、困難な時間構成の分析を通して、次のような、革新的な時間構成論にわれわれを導くことになる。

<sup>1</sup> Hua.X, S.119. 強調は、著者による。この文章で前提にされているのは、ノエシスとしての統握作用は、意識内容として実有的に意識されているということだ。このことについて、*Ideen I*, Hua. III, S.246ff.を参照。

<sup>2</sup> 同上。フッサールは、また、「この時間的なものを構成する体験の持続性の原流れにおける根源的に持続することは、把握なしに構成されており、この構成する体験の持続性は、逆説的にも、時間的に自己を構成し、知覚的に意識されてある。」(Hua.X, S.361)とも述べている。

- a. 志向性の概念の革新が行われる。それ以前は、志向性は、作用志向性として、「受動的」に対していえば能動的志向性としてのみ理解されていた。この自我の活動をともなう「方向づけられてあること」としての作用志向性の統握という根底は、「根源的な感性」への徹底した還元を通して無底の奥処へと開かれる。フッサールがここで示すのは、「第一の内在的時間秩序において感覚素材と感性的感情である。“完全に自我を欠く”感性的傾向、すなわち連合と再生産の感性的傾向であり、それによって規定された地平の形成がみられる。ここで問われるのは、根源的時間意識がどのようになっているかである。受動的志向性。」(Hua.XXXIII, S.275f.)
- b. ここで述べられている還元とは、「抽象」とも呼ばれたが、後に発生的現象学の方法とされる「脱構築」へと展開されるものである。これによって、開示された領域は、感覚素材と感性的感情の領域であり、内在的ヒューレ的対象性の所与性の「反省的でない周辺」(同上、282 頁)である。ここで「原発生」への遡及がみられ、「原発生(形相的形式としての)、内在的でヒューレ的な対象の構成の形式は、すべてのさらなる発生のための基底であり、すべての発生は、時間を構成する意識の原形式において遂行されている。」(同上)
- c. 純粋自我、作動する極としての非時間的自我は、『時間講義』の時期には、顧慮されていなかったが、根源的な感性の受動性への発生的遡及がみられるベルナウ草稿においては、自我極そのものへの問いだけでなく、「自我の極化」(Hua.XXXIII, S.276)への問いが定題化される。ヘルトの主張する、フッサールにおける隠れた形而上学的前提としての「自我極と対象極」という批判は、妥当しない解釈であり、自我と対象の極化を定題化する発生的現象学の射程に注視せず、それを見落とした解釈である<sup>3</sup>。

## 2) 衝動的志向性によって条件づけられた根源的構成としての時間化

上に述べられた二つの方向は、『受動的総合の分析』において、詳細に分析され、展開されることとなった。ベルナウ草稿の「原プロセス」への方向は、触発の現象の分析をもたらし、過去把持の縦の志向性における過去把持の内容の自己合致という方向は、連合の現象野を開くことになる。そして、この二つの現象領域は、単に感覚の感性的特性の次元に展開しているだけでなく、発生的現象学の「無意識の現象学」の基礎を形成しながらその広がり拡大していくのである。

触発の現象は、触発の力の増減に関わる規則性のもとに現出している。この触発力は、自我を触発し、自我の対向を誘発する。この力は、意識生の動機を増減により強弱が定まり、動機そのものは、連合の総合を通して覚起される。その際、重要であるのは、連合と触発による感覚素材の統一は、意識されず、気づかれずとも自

<sup>3</sup> 時間流の、とりわけ生き生きした現在の逆説を、作動する自我の自己分割と自己共同化という形而上学的構築によって解決しようとする、ヘルトの試みは、フッサールのヒューレ的構成の発生現象学による分析をまったく省みないものとなっている。この点の批判に関して、拙論「改めて時間の逆説を問う」(『現象学年報』15号)155頁、及び、「受動的発生からの再出発」(『現代思想』vol.29—17、所収)221頁以降を参照。

我を触発しようということである。ここでは、受動性における先対象的先構成の領域が開かれている。

この触発の非能動性にもかかわらず、触発は、受動的志向性と規定されている。このように触発を受動的志向性ととらえることに、批判がなされる場合があるが、その批判は、受動的志向性の意味規定を十分に捉えていない場合がほとんどである。志向性とは、一般的に、「何かに方向づけられているという意識の本質」を意味する。ヴァルデンフェルスは、Widerfahrnis（ここでは「できごと」と訳しておく）の概念を導入するとともに、それを情的な「何かに駆り立てられる」として、志向性の原意である「方向づけられていること」だけでなく、「方向づけの総合(Richtungssynthese)の湧出(Entspringen)」（Hua.XI, S.76）とさえ、峻別しようとする<sup>4</sup>。しかし、それによって、衝動志向性を通して特定の「欲求(Begehren)」の方向に動機づけられるという、連合の覚起による触発力という働きと視点が隠されてしまうことを見落としているように思える。フッサールは、「意識の目的」と「欲求の様相」を明確に区別しており、発生的現象学の分析において、例えば、当然、受動的志向性として働く「飲むことに向けられた本能的方向づけ」<sup>5</sup>について記述している。まさに発生的現象学においてこそ、この「方向づけの総合の湧出」が定題化されており、湧出するとは、ある特定の空虚表象が生成し、地平そのものが形成されることを意味しているのである。

空虚表象の充実／非充実ということは、その空虚表象の直観化の由来、ないし生成をもっており、その直観化において、それまで非直観的だったものが直観的になり、その直観に関わる空虚表象そのものが生まれ、形成されるのである。ある特定の受動的総合、例えば、乳幼児における受動的キネステーゼの充実連関は、原初的に「ゼロのキネステーゼ」として直観的に意識される。こうして、「ゼロのキネステーゼ」のみならず、「ゼロの聴覚」、「ゼロの視覚」等々、乳幼児に特有な特定の感覚野が分岐する以前の「共感覚」からの感覚野の湧出、分岐という、感性野の発生の探求分野が開かれてくる。このような感性野は、「親和性を通しての融合や抵抗性のもとにそれ自身で立ち現れる衝上化〔衝突しずれること〕という受動性において」（Hua.XI,S.148）生成している<sup>6</sup>。

この乳幼児の未分化な差異化以前の共感覚からの、視覚野、聴覚野、キネステーゼの野等々の個々の感覚野の分岐派生による形成ないし、差異化のプロセスは、フッサールにおいて発生的現象学で定題化されている。しかし、もしここで、ある特定の、まさに生成する特定の感覚野で形成される類似するなにかに受動的に方向づけられるということ拒絶した場合、そもそも特定の差異化を差異化となづけることがいかにして可能になるというのだろうか。

ヴァルデンフェルスは、「できごと」と「答えること」との間に「時間のズレ」を

<sup>4</sup> B. Waldenfels, *Bruchlinien der Erfahrung* (2002), S.196 を参照。

<sup>5</sup> E. Husserl, C-Manuskript, C16IV, S.11.

<sup>6</sup> ヴァルデンフェルスは、区別されるものが初めてそこで生起する差異化のプロセスをディアスターゼと呼ぶ。これは、フッサールにおける乳幼児における共感覚からの感覚野の分岐に対応しているように思える。B. Waldenfels, *Bruchlinien der Erfahrung*, S. 174 を参照。

位置づけるが、そのとき、レヴィナスがなすフッサールの感覚についての解釈、つまり「志向性としての感覚すること」を積極的に評価する。このときの志向性の意味は、無論、能動的志向性の意味なのである。それによって、フッサールが志向的でないとする感覚は、能動的志向性と解釈され、応答するという能動的志向性の特性が付与されることになる。この志向的感覚に対置させて、ヴァルデンフェルスは、非志向的な「できごと」を提示する。それは、ディアスターゼといわれる共触発の分離的差異化とされるのである。しかし、それ以上に、この分離的差異化そのものの現象学的分析の方向性は示されず、いわば、記述の限界となっている。

しかし、このような意味での、ヴァルデンフェルスの主張する「時間のズレ」は、フッサールにとっては、触発する連合的綜合によって先構成されたものに対して自我の対応が生じるのにかかる時間に他ならない。そのような「時間のズレ」に対して重要なことは、原印象と原過去把持との間の相互覚起は、まさに同時に生じているということである。それは、「同時融合」<sup>7</sup>と呼ばれる。この次元は同時的相互覚起の次元であり、ヴァルデンフェルスのいう作用志向性が生じるための「時間のズレ」は生じていないのである。

「神経現象学」を展開したヴァレラは、現在という時間を考察して、次のような見解に至った。認知論の意味での時間構成の逆説は、現在と過去の間の循環的因果性における自己触発的な発生的構成によって解決されうるというのである<sup>8</sup>。しかも、この見解は、「過去把持の完全な意味の獲得」<sup>9</sup>に他ならないとヴァレラは主張する。このヴァレラの「現在と過去の循環的因果性」という見解は、フッサールが発生的時間構成分析において、衝動的志向性に根源的に動機づけられ、条件づけられた生き生きした現在の流れとは、原印象の現在と過去把持の空虚表象の過去との相互覚起による同時的な内容的融合という発生的分析記述によって説明されていることに正確に対応している、といえるのである。

仮に、触発の現象からその志向性の性格を奪い取るとすると、差異化そのもの、つまり、なんらかのものに駆り立てられる、快にしろ、不快にしろ、食欲や運動欲にしろ、いずれの方向に駆り立てられるのか、その特定の差異化そのものが不明のままにとどまる。この差異化は、能動性以前の受動性の領域で生じている。そこでは自我は覚醒しておらず、作動してはいない。したがって、駆り立てられたり、まさにそれに直接関わっている当時者意識は、自我に関わるのではなく、意識生にかかわっているといわねばならないのである。

b. 連合の現象は、無論、経験論的—印象主義的に理解されてはならない。フッサー

<sup>7</sup> E. フッサール、C3VI, S. 75a.f. ここで、「次のように理解すべきである。原印象から原印象への移行とは、実は、新たな原印象が、それ以前の原印象に直接する過去把持的変転と同時的に一つになることであり、…したがって、内容的な原融合は、印象と直接的な原過去把持との間に、両者の同時性において生じているのである。」と記述されている。

<sup>8</sup> F. J. Varela, "Present-Time Consciousness," in: F. J. Varela and J. Shear (eds.) 1999, *Journal of Consciousness Studies*, 6, 2-3. 邦語訳「現在—時間意識」(『現代思想』vol.29-12) 196 頁を参照。

<sup>9</sup> 同上、同頁を参照。

ルにとって、客観的時間が前提にされたままで、線状的に表象される客観化された時間上の前後の印象を結びつけるのが連合なのではない。まずもって、このような客観的時間意識は、内在的な意識に直接与えられた時間意識に還元されねばならない。このような還元を経た内在的時間意識の構成は、「現象学的所与〔素材〕へ遡及し、その現象学的所与から経験されるものが、現象学的に成り立っている」(Hua.X, S.9)そのような構成を問題にするのである。

この経験の条件を問う、厳密な認識論的特性は、時間分析の深化である連合の分析を一貫している。このような連合の現象学は、発生の現象学に属し、そこでは、「それ自身、普遍的な発生的現象である、生き生きした内在的現在の構造」(Hua.XI, S.137)が、ヒューレー的核の位相内実を巡って問いつめつつ、分析される。この受動的に方向づけられていることは、無論、構成された対象としての何かに向けられた方向づけではなく、ヒューレー的所与性の先構成された位相内実に向けた方向づけである。まさにこの次元で、単に形式的ではない、内容的な、原印象と原過去把持との融合が問題になっているのであり、それだからこそ、時間構成が「原連合的」となづけられるのである。

生き生きした現在の具体的な体験の持続から、形式的特性を抽象して、フッサールの時間化を一方向的に形式的と規定すると、時間化における形式と内容の不可分離性の意味を見失うことになる<sup>10</sup>。時間化は、たえず具体的であり、持続しており、まさにその意味で「立ち留まり」、「流れて」いる。しかし、この「立ち留まり、流れる」というのは、決して単なる形式的規定なのではない。この立ち留まるということは、連合的覚起に条件づけられた時間内容を通してのみ、立ち留まりうるものであり、この内容が同時に今という形式を生み出すのであって、その逆ではない。受動的総合としての、内容的な「受動的同一化」は、まさに「立ち留まり」を可能にして、その痕跡がそのつどの今という形式であるにすぎない。ランドグレーベは、時間形式についてのカントとフッサールの立場上の違いを、フッサールにとって、「アプリオリに与えられた形式という仮定、つまり、そこにわれわれの様々な表象がいれば、収まり、順番づけられて配置されるような形式」は必要ではなく、「むしろ、反省的分析の中で意識における生起が証示され、形式が意識の中で形成されることが解明されうるのである。」<sup>11</sup>と述べている。

<sup>10</sup> 様々なテキストの中で、次のベルナウ草稿からのテキストは、この連関を大変明確に記述している。「反省的でない周囲は必然的である。この非反省的の周囲に必然的に属するのは、ヒューレーであり、われわれは、内在性の必然的本質形式に属するヒューレー的周囲について語り、絶対に第一である必然性とする。内在的時間のいかなる時点もこの第一の客観的内実なしにはありえず、内在的に向けられた時間の中でいかなる今も、ヒューレー的原印象なしにはありえない。」(Hua. XXXIII, 282)

<sup>11</sup> L. Landgrebe, „Die Zeitanalyse in der Phänomenologie und in der klassischen Tradition,“ in: *Phänomenologie – Lebendig oder tot?*, 1969, S.27. なお、この論文を示唆してくださった R. Sepp 氏に感謝したい。ランドグレーベは、この論文においてすでに、フッサールの時間分析の発生現象学的観点を指摘しており、フッサールの時間分析を「時間そのものが初めて形成されてくる」現象の分析、ないし、「自己形成する時間」(同上、28頁)の分析と特徴づけている。この論文で究極的に作動する時間流の匿名性を指摘するラングレーベは、後に生き生きした現在の時間流が衝動的志向性によって条件づけられていることを

生き生きした現在の立ち留まりは、時間化の中心的問題である。この時間化の連合的受動的綜合の起源の問いは、最終的に先構成の「徹底して先—自我的なもの」の次元を開示する。この次元に属するのが、原触発としての衝動志向性であり、これが最終的に生き生きした現在の立ち留まりを条件づけている<sup>12</sup>。衝動志向性は、徹底して先—自我的であるのは、それが受動的綜合としての触発を一つの方向へと基づける原触発と規定されているからである。

以上の論述から、生き生きした現在の自我論的—形式的解釈は、時間化の原初の流れの逆説には妥当しえないことは明白である。自己分割と自己共同化という自我の構造を考察する形而上学的構築は、受動性をめぐる発生的現象学において、立論の基盤と確証根拠を失うのである。

## 2. 発生的現象学における他者

われわれはこれまで、時間構成の発生への遡及的問いが、徹底して先—自我的なもの先構成の次元における超越論的に把握された衝動志向性に導いているのを見てきた。この結論は、フッサールの相互主観性の構成の問題を解明する上で、決定的な意味を持つことになる。

まず第一に、超越論的自我の自己同一性は、相互主観性の根拠づけに中心的役割を果たすものではないことが明らかである。むしろ問題になるのは、間モナダ的時間化における自我中心化と身体中心化の発生の問題となる。第二に、衝動志向性は、間モナダ的に、すなわち間身体的に作動している。そして身体中心化は、ちょうど、受動性が能動性を基づけるように、自我中心化を基づけている。第三に、本能的—間モナダ的共同化は、人格的—間モナダ的共同化の実現のための間身体的基盤の役割を果たしており、両者あいまって、理性の目的論に位置づけられる。

1) 相互主観性の問題とは、フッサールにとって、相互主観性の構成の問題である(時間の問題が時間意識の構成の問題であったように)。この構成の問題は、形式的妥当性が問われる妥当性の問題なのではなく、他者の意味の形成、すなわち、「完全なモナダ的個別性の可能性」(Hua.XI, S.341)が問われる発生的問題である。

志向性を狭く理解する自我論的解釈は、時間化を条件づける衝動志向性の領域にいたることはできず、したがって、先—構成の次元において徹底的に先—自我的なもの、先—世界、先—時間、先—存在の領域を解明できないのである。このような解釈は、モナダ的現象学の枠組みのなかでの新たな位置づけを獲得せねばならないだろう。「発展の中にある」(Hua.XV, S.595)自我は、もはや、自我論の内部ではなく、モナダロジーの枠内で、「系統発生的」(Hua.XV, S.179)に、また、個体発生的に考察されねばならない。この先—構成の次元は、構成のための単なる前段階なのではな

---

明言することになる。その点に関しては、L.ランドグレーベ「目的論と身体性の問題」(ヴァルデンフェルス他編『現象学とマルクス主義II』所収、1982年)305頁を参照。

<sup>12</sup> 当然だが、衝動志向性を自我的なものと性格づけることはできない。このような不適切なキューンの解釈について、拙論„Triebintentionalität als uraffektive passive Synthesis in der genetischen Phänomenologie,“ in: *ALTER*, 2001, Nr. 9, p. 230ff.を参照。

く、単なる現勢態の実現のための前段階にすぎない潜在態なのでもない。それは、ちょうど、受動性が単に能動性のための前段階ではないのと同様である。能動性は受動性によって基づけられるという基づけの基礎原則は、フッサールの構成論全体の欠くことのできない根本原則となっているのである。

2) 身体中心化、すなわち、自分に固有な身体と他の身体との差異化が他者の他者性の起源を確定すると同時に、自我と他我の間身体性を共通の根源とする等根源性を根拠づけることが可能か、という問いが徹底して問われねばならない。フッサールの相互主観性に向けられたほとんどの批判、特に、等根源的な間身体性を基づける受動的志向性としての「対化」の概念に向けられた批判は、的を逸した批判となっている。なぜなら、そこでは、受動的志向性の真意が捉えられていないからである。フッサールの発生的現象学では、衝動志向性を通しての母と子の間身体的原コミュニケーションが、周到に分析され、現象学的に根拠づけることは、十分に可能なのである。そこでは、身体中心化の分析が二段階に分けて考察されている。

第一の段階は、共感覚的間身体性から、例えば、聴感覚野と受動的で本能的な非恣意的なキネステーゼの感覚野が差異化してくる、個々の感覚野が分岐派生してくる生成の直観化のプロセスである。このプロセスは、幼児の喃語と母親のその模倣の事例において、連合的総合の覚起の規則性のもとで、大変鮮明に記述し、解明可能なのである<sup>13</sup>。

第二の段階は、幼児が、能動的で恣意的なキネステーゼを自由に活用できるようになる段階である。「自由に活用できるキネステーゼのシステムの総合」<sup>14</sup>が形成される。そして、このとき、自由に動かせるキネステーゼを伴う自分に固有な身体とそのようなキネステーゼを伴わない他者の身体との間に、深い断絶が広がる。この断絶は同時に自我と他我の断絶の起源を意味している。

レヴィナスの主張する他者の他者性の一つの重要な論拠は、先に言及した感覚を能動的志向性と解釈する点に帰着する。彼の理解する原印象は、徹底して受動的であり、志向的な感覚によって時間化されることはなく、また時間化されてはならないとされる。だからこそ他者の他者性は、原印象の非時間的な原受動性として確保されるというのだ。こうして、受動的総合における原印象と原過去把持との触発的—連合的融合の次元は、レヴィナスにおいて完全に見落とされ、間身体的な間モナド的共同化がわれわれの日常に、常に生き生きと働いている事実と、このような間身体性の働く受動的間主観性の領域が、能動的な間モナド的共同化の展開のための必然的な基盤であることが、見失われてしまうのである。

3) 間モナド的共同化の能動的な感情移入において、ある人格が他の人格に人格全体で向かうことによって「我と汝の合致」が生じうる。しかし、そこでは、自分自身の行動を客観視し、対象化する理論的で反省的態度は、決定的な役割を果たしてはいない。能動的間主観性を基づける受動的で先—自我的な間モナド的原コミュニ

<sup>13</sup> 同上、227頁以降を参照。

<sup>14</sup> この点について、2000年オルモックの現象学国際会議で発表の拙論 „Zur Phänomenologie des Du“ (近刊)、並びに、教授資格論文である *Ki als leibhaftige Vernunft*, 1997 を参照。



ケーションにおいては、いまだ自我極もそれに相関的な対象極も形成されてはいない。しかも、重要なのは、この能動的相互主観性の頂点に位置する「我と汝の合致」においては、形成ずみの自我極と対象極としての汝が消滅し、融合する、ということである。

この次元において他者の他者性との直接的触れ合いが生じうる。そのときこの他者の他者性には、具体的で身体的な唯一の内容をともなう事実的な個別性が排斥されることなく帰属している。レヴィナスはしかし、この具体的内容をともなう他者を、内容構成にともなう能動的志向性と対象化のゆえに、いわゆる「我—汝—関係」から排除しようとする。しかし、原初的な流れる先—自我的で先—对象的な時間化において、形式と内容が不可分離に生じているのと同様に、主観的形式と客観的内容の不可分離性は、我と汝の合致にも妥当するのであり、そこでは他者性に帰属する具体的内容が、非対象的な他者性へと転化しているのである。

ある人格が他の人格に全体的人格として向かうという特有のあり方は、人格が全体的になるということがいかなることであるのかが、現象学的に解明されて初めて、明確になるものである。そしてその際、大変重要な意味をもつのが、発生的現象学の考察であり、そこで、無意識に作動する自己中心化と身体中心化の発生のプロセスが解明され、自我極と対象極の形成に自己中心化と身体中心化がどのように加担しているのかが、究明されうる。まさに、この通常、隠れたままで働いている自己中心化と身体中心化が、無意識的に、あるいは意識されて「全体的な向かい」へと昇華されるときはじめて、他者との真の触れ合いが実現するのである。我と汝の合致の超越論的可能性は、対象化する主観と対象化された客観の亀裂の克服である。その際、対象化の由来を受動的総合の本質規則性で解明できる発生的現象学が対象化の克服に大いに寄与可能であることに何の不思議もないばかりか、我と汝の合致が、発生的現象学による、無意識的に働き、先—反省的で先—言語的に働く自己中心化と身体中心化の発生の解明なしには、その達成が難しいのも当然であるといえよう。